

## 科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

24 6 20 現在

機関番号：8 7 1 1 1

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2 0 0 8～2 0 1 1

課題番号：2 1 5 2 0 7 8 4

研究課題名（和文）九州地域における経筒の占める歴史的位置

研究課題名（英文）Historical meaning of Sutra case in the Kyushu area

研究代表者 森井 啓次

(MORII KEIJI)

九州歴史資料館 学芸調査室 研究員

研究者番号 1 0 4 4 6 8 8 3

研究成果の概要（和文）：福岡を中心とする北部九州地域は全国有数の経塚造営地である。その歴史的意義について経筒資料の型式分類、分布調査そして科学分析を行い検討した。結果、一部の銅製経筒が宋からの輸入品である可能性を提示し、陶製経筒や陶磁器、青銅鏡等と合わせ博多、大宰府が経塚に埋納する品を交易する中心地であった事を指摘した。また、福岡は経筒生産の地でもある。これら諸要素から経塚造営が福岡で盛行する結果になったと考えられる。

研究成果の概要（英文）：Northern Kyushu area, centering on Fukuoka, was one of the major Sutra mound construction site in Japan. The historical meaning is examined by conducting the classification, distributional survey and scientific analysis of the Sutra case materials. As a result, the possibility is presented that some of the Gilt bronze sutra cases were imported from Sung Dynasty. In addition, it is pointed out that Hakata and Dazaifu were the center to trade goods such as the Ceramic sutra cases, China and Bronze mirrors, together with the Gilt bronze sutra cases, to be buried in Sutra mound. Moreover, Fukuoka had characteristics of the production area of the Sutra cases. It is thought that these elements resulted in constructing more Sutra mounds in Fukuoka.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,170,000	0	1,170,000
2010年度	500,000	0	500,000
2011年度	800,000	0	800,000
年度			
年度			
総計	2,470,000	0	2,470,000

研究分野：考古学

科研費の分科・細目：史学・考古学

キーワード：考古学・日本史・経塚

## 1. 研究開始当初の背景

経塚は11世紀から12世紀代を中心としてほぼ日本全国にわたり造営が流行した。不安定な社会情勢と当時の支配階級、富裕層において信じられた末法思想と合致して流行し広まったものと考えられている。経塚分布域は当時の中枢である畿内と北部九州が中心となる。権力の中枢が所在する畿内

地域に流行する点は理解できるが、北部九州において畿内を上回る流行を見せる点は興味深い事実である。また、九州全域に分布があるわけではなく、北部九州地域に著しい集中を見せている事が特徴である。

加えて11世紀後半から12世紀中頃の経塚造営流行の初期段階に造営が集中していることも北部九州の特徴である。

## 2. 研究の目的

経塚造営行為は宗教的な信仰によるものが根本にあり、本質的理解をするためには宗教的理解が不可欠である。しかし、有形資料として個を見たとき、その内容物には商業的な要素が考えられる。陶製専用経筒や副納品である青、白磁合子類、湖州鏡などは大陸からの輸入品であり、内容には国際的な内容が含まれる。これらの資料についても分布域は北部九州を中心とする。その背景にあるものを含めて経塚を研究することにより、古代末における人々の精神的な有り様だけでなく、社会の一端を垣間見る事ができ、当時の歴史復元の一助になるものと期待できる。

## 3. 研究の方法

(1) 資料調査 実資料についてできうる限り実見。不可の場合は報告書等により確認する。

(2) 資料分析 考古学における型式分類の手法により分類を行う。また文献などにより分布状況を調査する。

(3) 科学分析 補完調査

- ① X線CTスキャン：非破壊での内部構造調査
- ② 赤外線撮影：墨書等の確認
- ③ 蛍光X線分析：銅製経筒の成分分析

(4) 検討 (1)～(3)の結果より総合的な分析及び検討を実施

## 4. 研究成果

(1) 資料分析

① 資料調査

経筒は比較的古くから古美術品として珍重されてきた為個人蔵品が多い。現在では寄贈等により公的機関に収蔵される例も多いが、北部九州出土とされる経筒は全国に散在し、関東や関西圏の博物館等に数多く収蔵されている。これらについてできうる限り機会を捉えて実見、また実測図等の資料を収集し、型式分類の基礎資料とした。

② 経筒の分類と分布

北部九州に造営された経塚に埋納された経筒は様々なバリエーションが存在する。素材では銅、陶が大半を占め、九州では滑石製もあり、稀に鉄を用いる例も存在する。

本研究ではこの中でも最も類例が多い銅製経筒に焦点を置いて調査を行った。

まず、各経筒の型式分類を行った。北部九州の経筒形状を特徴づける要素として「鈕」の形状がある。鈕の形状は単純な鈕を持つ例もあるが、基本的には仏塔の相輪を模した「相輪鈕」と宝珠を模した「宝珠鈕」の二つに分類され、単純な形の鈕の大半は「相輪鈕」「宝珠鈕」いずれかの簡略化し

たものと考えられる。

筒身では多くの例では突帯（節）が存在する。突帯の場所と本数には複数の組み合わせがある。また台座の形状にも複数の形状があり、これらの諸属性の差異を組み合わせることで経筒の型式分類が可能となる。先行研究では制作方法と分類で7型式に分類されていたが、今回の調査でこれを見直し6型式とした。

分類された経筒の分布域を調査した。先行研究事例のとおり設定された型式と分布域がほぼ相関する事を確認した。ただし範囲については類例の増加及び型式分類の見直しからやや広がりを見せること、輪積式経筒のみは広域に分布することを再確認し、他の銅製経筒と比べて特異な状況であることを確認した。

(2) 経筒の科学分析

次に、補完的な意味合いから実資料について各種装置を用いた科学分析を実施した。これについては調査を行うことが出来た資料が極めて限定された（九州歴史資料館蔵品の中の一部）。これについては今後継続して作業を実施することとするが、ある一定の成果と修正すべき課題が明らかとなった。

① X線CTスキャン装置

X線CTスキャン装置を用いて非破壊による内部断層写真を撮影することが可能となり、蓋が吸着し内部が伺えない経筒内の状況を明らかにすることができた。筒内に固着して取り出すことが困難な状況の紙本経の状態や、底部付近にのみ残存している紙本経の巻数を明らかにすることができた。八巻のものであれば法華経一部八巻であることが推察され、また十巻のものはこれに開経、結経を加えた十巻であることが推察する事ができた。

また、X線CTスキャンにより経筒が後補された事実を明らかにすることができる。経筒が美術品として商業目的で売買が行われていることから贋作もしくは根拠のない補修が行われている例が存在する。これらを判別する事にも有効である。

② 赤外線撮影

経筒に書かれた墨書について明らかにするために赤外線撮影を行った。肉眼で観察（墨書の有無）ができない資料については赤外線撮影を行っても新たに確認することは不可能であったが、肉眼により不鮮明な資料について赤外線デジタル撮影を行い、画像処理による補正作業により画像を鮮明にし、判読の補助とすることには極めて有効であった。これにより従来明らかとなっていなかった陶製経筒2点について新たに墨書の有無及び文字の判読を行うことが出来た。

### ③ 蛍光X線分析

蛍光X線による経筒本体の成分分析を行い、青銅の産地同定を行うことを目途として実施したが、測定部位の異存状態により数値にバラツキが見られた今回借用資料や寄託資料による調査で、極力フレッシュな面を計測部位として選択したものの、芳しい結果が出なかった。しかし、測定数値の傾向としては今後、測定機器の精度や測定部位の更なる精密化により検討するに値するものとしての見通しを出すことが出来た。これについては今後とも継続して研究を実施する。

### (3) 検討

以上、経筒資料の確認と型式分類、分布域の調査に加えて補助的に科学的分析を実施し、先行研究の成果を踏まえた上で検討を実施した。

北部九州における銅製経筒は多くの型式が存在するが、それぞれが一定の地域内での分布に留まっており、「地域性」という整理が可能である。その中でやや特異な位置を占める一群が銅製輪積式経筒である。九州内では長崎県、鹿児島県を除き広域に分布し、また本土においても岡山県や京都府でもその出土例が報告されており、画一的な形状でありかつ極めて広域に分布する特異な経筒である事が明らかとなった。

また、輪積式経筒にはしばしば墨書にて宋人名と見られる名が書かれる例が存在する事も特筆される事柄であり、線刻例は存在するが墨書による宋人銘は今のところ輪積式経筒以外には知られていない。

ここで銅製経筒に次いで多い陶製経筒の状況を調査した。陶製経筒には専用品と転用品があり、陶製専用経筒はいずれもその産地は国内ではなく、中国・宋からの輸入品である事が先行研究により示されている。

華南地方で焼成されたこれらの経筒は日本での要請により焼成されたと考えられている。

陶製専用経筒にも複数の形状が知られるが筒身はほぼ例外なく砲弾円筒形で、その形状を大きく変える点はやはり鈕の形状にある。銅製経筒同様の「相輪鈕」「宝珠鈕」と単純な「釦形鈕」に分類する事が可能であるが、類例からは「相輪鈕」が大半で銅製経筒では数多い「宝珠鈕」の例は極めて少ない。また、陶製専用経筒には墨書により宋人銘が書かれる例がある。また判読は困難なものの花押を記した例も認められる。

これら陶製専用経筒の分布は北部九州を中心に九州島内では南は熊本県や宮崎県まで広く分布し、本土でも山口県に類例が認められる。また転用経筒としても輸入の陶磁器を用いる例は多数存在しており、こちらは四国や中国地方にかけて広く分布する事を確認した。

上記の検討から銅製経筒の中で特異な輪積式経筒を陶製専用経筒との類似点が多く認められ、結論として両者はいずれも中国からの舶載品であると考えに至った。当時の日宋交易の中心地は博多及び大宰府である。様々な交易品の一つとして経筒が位置づけられ、博多・大宰府を中心に流通していたと考えられる。

これに加えて経筒生産についても再確認した。現在の所、銅製経筒の鑄型と見られる資料は確実な物は福岡県京都郡みやこ町山鹿宮田遺跡の一例のみ（可能性がある資料としては京都府京都市で一例ある）、未製品として福岡県太宰府市大宰府条坊跡から相輪鈕の部分一例があるのみである。北部九州では経筒の生産地であることが確実な唯一の地域であると言える。

以上の事から、北部九州の地が経塚造営の中心となり得た大きな歴史的背景として「物」としての経筒を生産し、かつ流通させた拠点であった事が宗教的側面だけではない歴史的な意義であると考えられる。

なお、本研究の成果報告として、平成24年1月5日から2月26日まで、九州歴史資料館において「北部九州の霊山と経塚」と題して企画展示会を実施した。

国宝・重要文化財資料以外にも個人蔵品や初公開の資料を含めた経塚資料を今回の調査成果を踏まえた解説を加え公開し、多数の見学を得た。

## 5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[学会発表] (計5件)

- ① 森井啓次、福岡の経塚遺宝について、アクロス・文化学び塾、2012、アクロス福岡
- ② 森井啓次、北部九州の経塚-特に福岡県出土の経筒資料を中心に-、九州歴史資料館開館1周年記念シンポジウム・九州国立博物館大宰府学研究シンポジウム、2012、九州国立博物館
- ③ 森井啓次、北部九州の経塚と埋納経筒、九州歴史資料館講座、2012、九州歴史資料館
- ④ 森井啓次、大宰府の経塚 四王寺山経筒の広がり、2010、朝日カルチャーセンター
- ⑤ 輪田慧・森井啓次・鳥越俊行・今津節生、三次元デジタル情報の博物館展示への活用-線刻のある銅製経筒のデータ化と展示-、日本文化財科学会第26回大会、2009、名古屋大学豊田講堂

[図書] (計2件)

- ① 森井啓次他、九州歴史資料館・九州国立博物館、祈りの世界 - 北部九州の霊山と経塚 -、2012、32
- ② 森井啓次編、九州歴史資料館、北部九州の霊山と経塚、2012、48

## 6. 研究組織

(1) 研究代表者

森井 啓次 (MORII KEIJI)

九州歴史資料館・学芸調査室・研究員

研究者番号： 1 0 4 4 6 8 8 3

(2) 研究分担者

( )

研究者番号：

(3) 連携研究者

加藤 和歳 (KATO KAZUTOSHI)

九州歴史資料館・文化財調査室・技術主査

研究者番号： 8 0 5 4 3 6 8 6